

絵本の読み聞かせにおける日米比較

—「意見」に関する発話の統計的分析—

尾崎 (和賀) 萌子 (慶應義塾大学大学院生)

1. 研究背景と目的

子供の言語発達を分析するにおいて、最も主流な分析方法は親子の自由遊びや絵本の読み聞かせの観察と記録である。中でも絵本の読み聞かせは多くの識字文化で幅広く取り入れられており、さらに絵本を指定することで読み聞かせ内容や時間などのコンテキストにある程度の制約をかけることができるため、子供の言語発達の言語間比較との親和性が高いと言える。本研究では 0;2-4;11 の日本人とアメリカ人の親が絵本の読み聞かせ中に意見を言ったり聞いたりする頻度を比較し、日米の親がどのような過程で子供を社会化しているのかを分析した。

絵本の読み聞かせにおける談話分析は Ninio and Bruner (1976) による母子間会話のフォーマット研究が発端であるが、彼らの分析は中産階級のイギリス人家庭の一人息子を対象とした一例研究であったため、その後より多くのデータを用いたラベリング以外の発話内容に関する研究が増えた。特に近年では文化間比較や、社会階層や性別など被験者の実態が絵本の読み聞かせに及ぼす影響の研究が盛んである (Chan et al., 2009)。その一環で、アメリカ人の親の方が日本人よりも情報のやりとりを重視する傾向にあることが指摘されており、特に絵本の読み聞かせ場面においては、意見やフィードバックを介した情報の交換が多いことが指摘されている (Murase, et al. 2005)。Fernald and Morikawa (1993) は 0;6-1;7 の母子ペア 60 組を対象として、アメリカ人の母親は自由遊び中に “That’s a dog. Do you like it? She’s got a collar.” などモノの名前や意見に焦点を当てた情報の請求をすることが多いのに対して、日本人の母親は「はいどうぞ、ちょうだい。ありがとう」などの慣習的発話に焦点を当てる傾向が強いと主張している。

しかしながら、これらの研究の多くは分析対象の年齢幅が狭く、データ数も限定的である。そのため、横断的分析が少なく、仮にアメリカ人の方が情報重視だとしても親がどのようにその価値観を子供に伝達しているのかが十分には明らかになっていない。そこで本研究では 0;2-4;11 の幅広い年齢層を対象とした豊富なサンプル数を元に横断的分析を行い、日米の親がどのように子供の意見交換を促すのかを明らかにすることを試みた。

2. 分析方法

0;2-4;11 の子供を持つアメリカ人の親子 171 組と日本人の親子 102 組を対象に、アメリカ人は *The Very Hungry Caterpillar* を、日本人はその和訳版である『はらぺこあおむし』を自宅で子供に読み聞かせている動画を撮影してもらい、¹ 更に日常的な読み聞かせの頻度・年齢・性別・学歴などの実態に関するアンケートに回答してもらった。動画データは文字起こしした上でテキスト外の発話を全て MAXQDA を用いて発話単位でコード付けし、更に読み手が意見を言っている場合には別途コードをつけた。発話単位は子供の発話の不完全性を考慮し、会話分析などで広く用いられている Brown et al. (1984) の Phrases and Clauses Unit ではなく、一つの考え (Idea) を一つの発話とする Kroll (1977) の Idea Unit を元にコード付けした。また意見を言うことと子供に意見を問うことを含めた「意見交換」という発話行為は広く定義付けし、「きれいだね」(‘He’s beautiful’) や「緑色は好き？」(‘Do you like green?’) などの明示的な意見交換のみならず、「わー」(‘Aww,’ ‘Huh!’ ‘Wow!’) などの感嘆詞も話者の興奮や驚きを表しているという点で意見交換に含めている。

¹ 『はらぺこあおむし』はあおむしが蝶になるまでの過程を描いた 22 ページの絵本である。冒頭ではあおむしが卵から孵り、食べ物を探し始める。その後 6 日間果物やお菓子を食べ続け、腹を壊したあおむしは 7 日目の日曜日に緑の葉っぱを食べて体調を整え、さなぎになり、やがて蝶となる。この絵本を選定したのは、世界的ベストセラーであり被験者が比較的入手しやすいことに加えて、物語の日本語翻訳が比較的直訳であること、絵のレイアウトが日米共に一緒であることから日米比較が行いやすいからである。

3. 親子の実態が意見交換に及ぼす影響

はじめに、被験者の母国語以外の実態、即ち年齢・性別・日常的な読み聞かせの頻度・『はらぺこあおむし』を読んだ経験が発話内容に影響を及ぼしている可能性があることを考慮し、重回帰分析で被験者の実態と発話内容の関連性を検証した。² その結果、日本人に関しては父親の方が母親よりも意見交換を用いる割合が高いことがわかった（表1）。しかしながら、回帰式のあてはまりのよさを表す決定係数である R^2 が 0.126 であり、緩い相関を表す 0.3 以上に当てはまらないこと、また変数が回帰式に及ぼす影響の強さを表す β の数値が -0.287 と両端の -1.0 もしくは 1.0 からの距離が遠いことから、有意差が認められたとはいえ、実際の関連性は極めて弱いと考えられる。

先行研究では絵本の読み聞かせ場面において読み手や子供の性別が発話に影響を及ぼすことが指摘されているが (Leaper et al., 1998; Teale, 1986)、上述の通り本研究では性別が発話に及ぼす影響は極めて限定的だったことから、絵本の読み聞かせ場面における性別と発話内容の関係性に関する研究が最盛期を迎えていた 1980-2000 年頃と比べて現在は性役割が変化している可能性が考えられる。

なお、アメリカ人の親の意見交換に対する実態の影響は見られず、日本人の意見交換に関しても読み手の性別以外の影響因子は認められなかった。

表1：被験者の実態が読み手の意見交換に及ぼす影響の重回帰分析

	R^2	$p(R^2)$	β	p
日本人の読み手の発話 x 読み手の性別	.126	.049	-.287	.005

R^2 = モデルの決定係数 ($R^2 > .3$) , $p(R^2)$ = R^2 の有意確率 ($p(R^2) < .05$),

β = 標準化係数 0=男 1=女の2値を用いた名義尺度で検証 ($-1.0 < \beta < 1.0$) , p = 有意確率 ($p < .05$)

4. 親の意見交換の傾向における日米差

被験者の母国語以外の実態が意見交換に及ぼす影響が極めて限定的であることを確認した上で、続いて親の意見交換の傾向における日米比較を行った。その結果、1歳未満の子供を持つ日本人の親が意見交換を行う割合は、外れ値を除いた大半が総発話数の20%以下であった（図1）。しかしながら、1歳以降は緩やかに増加し、1-2歳児に対しては最大で約35%になり、4歳児に対しては最大で総発話数の約半数が意見交換に費やされていた。一方で、アメリカ人の親は日本人とは逆の傾向を辿った。個人差が大きいものの、1歳未満の子供を持つアメリカ人の親は最大で全発話が意見交換に費やされていたが、子供の年齢が上がれば上がるほどこの割合は下がり、4歳児を持つ親が意見交換を行う割合は外れ値を除いて総発話数の40%に止まった（図2）。

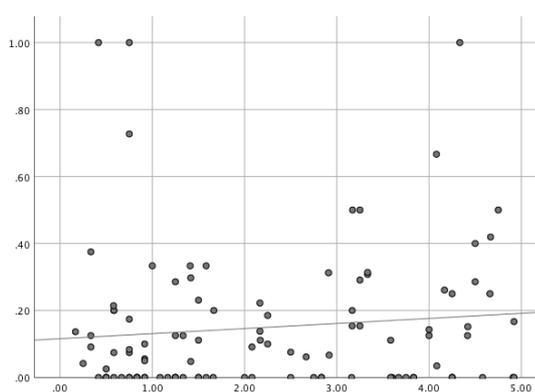


図1：日本人の親の意見交換の割合における子供の年齢別推移

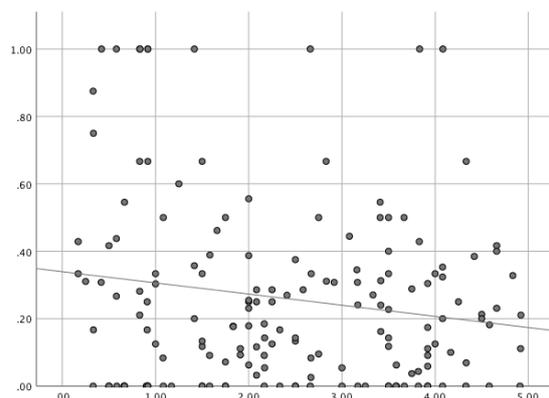


図2：アメリカ人の親の意見交換の割合における子供の年齢別推移

このように日本人は右肩上がり、アメリカ人は右肩下がりの割合で意見交換を用いるということは、絵本の読み聞かせ

² 重回帰分析は線形回帰で強制投入法を用いた。

において親が足場作りする方法が日米で異なることを示唆している。アメリカ人の親はことばでの会話のやりとりが未だ成立しない乳幼児に対してより多くの意見を発しており、発話能力が発達する前から意見交換という発話行為に子供を晒し、足場作りをしていると考えられる。例えば、生後4ヶ月の女児に対する母親の読み聞かせ(例1)では Huh! という感嘆詞でちょうちょの美しさに心奪われた様を表した後、子供はまだ返答する言語能力が無いにもかかわらず Is he pretty? と子供の意見を聞いている。一方で、4歳11ヶ月になると親は子供にターンを譲るようになり、例2にあるように、子供の "What's stomach-ache?" という質問に対して返答するために、意見交換よりも絵本の内容の説明に費やされる発話が多くなる。それと同時に、子供は自発的に意見を発するようになり、「あおむしは食べ過ぎて腹が痛いから悲しい」という推論から "he's so sad" と発した子供の意見に対して、「あおむしは食べ過ぎたのだからもって体が大きくなって良いはずだ」という推論をさらに効かせて父親は "I'm surprised he's not fatter." と一見繋がりなさそうな自らの意見を間接的な返答として用いている。このように、子供が意見を自ら言えるようになるとアメリカ人の親は足場を減らしつつより高度なコミュニケーションの達成のために意見を発するようになることが考えられる。

例1: 0歳4ヶ月の女児に対するアメリカ人母親の読み聞かせ³

MOT: *He built a small house, called a cocoon, around himself. He stayed inside for more than two weeks. Then he nibbled a hole in the cocoon, pushed his way out and.. Huh! He was a beautiful butterfly! You see it? You see the butterfly? You see the butterfly? Is he pretty? The end!*

例2: 4歳10ヶ月の男児に対するアメリカ人父親の読み聞かせ

FAT: *That night he had a stomach-ache.*

CHI: What's stomach-ache?

FAT: Your tummy hurts.

CHI: Oh.

FAT: Does he look like his tummy hurts?

CHI: Yeah, he's so sad.

FAT: I'm surprised he's not fatter. He ate all that stuff, right?

一方で、日本人の親は乳幼児に対して意見を発する割合が少なく、登場人物と同化して「えんえん」と泣き真似をするなど、登場人物との共感を促すことに多くの発話数が割かれる傾向にある。また意見を発する際には半数以上の発話に終助詞の「ね」が用いられており、「きれいだね」や例3にあるように「いっぱい食べたね」など子供に同意を求める発話が高頻度で使用されていた。このような意見は意見交換というよりも共感や同意の一手法として発せられていると解釈することができる。即ち、意見をことばで表現できない乳幼児に対して日本人の親が期待していることは意見を言えるようになることではなく、まずは他者と共感することであると考えられる。そのため、意見交換のための足場作りも乳幼児に対しては弱く、認知的発達が進んでから子供との意見交換を期待し、発話に占める割合を次第に高めることで足場を作っている可能性がある。例えば、例4では絵本を読み終わった後に母親が子供にまず絵本の内容を「いっぱい食べたらちょうちょになった」と要約した後、「すごかったね、いっぱい食べたね」という自らの意見を発し、続いて「何が食べたかった?」と子供の意見を伺っている。このように、絵本の内容から派生して自らの意見を述べた後に子供の意見を聞くというフォーマットは3-4歳児を持つ多くの日本人の親にみられた。

例3: 0歳3ヶ月の男児に対する日本人母親の読み聞かせ

MOT: *チョコレートケーキとアイスクリームとピクルスとチーズとサラミとペロペロキャンディーとさくらんぼパイとソーセージとカップケーキとそれからすいかですって! いっぱい食べたね。そのばんあおむしは、おなかがいなくてなきました。えん、えん、えん。*

例4: 4歳8ヶ月の男児に対する日本人母親の読み聞かせ

MOT: *いっぱい食べたらちょうちょになった。 すごかったね、いっぱい食べたね、何が食べたかった?*

CHI: もう一回、はじめのところからね。私はりんご、いちご、一つね、全部。

³ 以降、例文の斜体は絵本のテキストを読み上げている部分、下線は意見交換。

このように日米間に教育方法の差が生まれる原因について、日米における教育的価値観の違いが考えられる。アメリカ人親子は言葉を介しての双方向な会話を通して意図的に親が子供に知識を教授する「教え込み型」であるのに対し、日本人は親と子が共感的相互依存の関係にあり、教育において模倣や偶然学習が重要視される「染み込み型」とされている(東, 1994)。しかしながら、アメリカ人が教え込み型で対話によるやりとりを重視しているとするれば、質問の意味を理解できない乳児に例1のように“Is he pretty?”と質問する動機は無く、また日本人が例4のように4歳児に対して意見を言うことを積極的に促していることも染み込み型とは言えない。確かにアメリカ人の4歳児に対する親の発話は教え込み型で0歳児に対する日本人の親の発話は「染み込み型」であるかもしれないが、少なくともこれが全年齢に共通する普遍的な文化的要素とは言えないだろう。むしろ日本人とアメリカ人では足場作りのプロセスが反転しており、日本語では共感をはじめに教えてから意見に移行するのに対し、英語ではその逆のプロセスを辿ると考えることができる。つまり日米ともに「教え込み型」と「染み込み型」を発話内容に合わせて併用しているのであり、どちらが優先されるのかは文化的要素よりもコンテキストや子供の発達段階に依存していると考えられる。

一方で、この分析はあくまで『はらぺこあおむし』の読み聞かせに統一したデータ群によるものであり、ごく限られたコンテキストで検証した分析結果であることを認める必要がある。分析結果を一般化するためにはより多くのサンプリングに加え、他の絵本や自由遊びなど他のコンテキスト下での更なる検証が必須である。また、日米の子供の発話の分析も行い、意見交換に限らず親の幅広い発話内容を量的のみならず質的にもより丁寧に分析する必要がある。

5. おわりに

本研究では0;2-4;11の日本人とアメリカ人の親の絵本の読み聞かせにおける意見交換を比較し、日米の親がどのような過程で子供を社会化しているのかを分析した。その結果、日本人の親は子供の年齢が上がるにつれて発話に占める意見交換の割合が高くなるのに対して、アメリカ人はその逆の過程を辿ることがわかった。このことから絵本の読み聞かせにおいて親が足場作りする過程が日米で反転していることが示唆される。即ち、アメリカ人の親は子供が喋り始める前から意見を発したり聞いたりして足場を作り、子供がその能力を習得し始めてからは足場を減らすのに対し、日本人の親はまずは共感の習得を優先し、意見交換に関しては子の発達に合わせて意見の割合を緩やかに増やしていく可能性がある。既存研究ではアメリカ人はやりとりを介した知識の教授が多く、日本人は模倣や偶然学習を重視することが指摘されているが、どちらが優先されるかは文化的要素よりもコンテキストや子供の発達段階に依存していることが示唆される。

参考文献

- 東洋(1994). 日本人のしつけと教育：発達の日米比較にもとづいて 東京大学出版会
- Brown, G., Anderson, A., Shillcock, R., & Yule, G. (1984). *Teaching talk: Strategies for production and assessment*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Carle, E. (1969). *The very hungry caterpillar*. NY: World Publishing Co.
- カール, エリック. (1976). はらぺこあおむし. もりひさし訳 偕成社
- Chan, C. C., Brandone, A. C., & Tardif, T. (2009). Culture, context, or behavioral control? English- and Mandarin-speaking mothers' use of nouns and verbs in joint book reading. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 40(4), 584- 602.
- Fernald, A., & Morikawa, H. (1993). Common themes and cultural variations in Japanese and American mothers speech to infants. *Child Development*, 64(3), 637- 656.
- Kroll, B. (1977). Combining ideas in written and spoken English: A look at subordination and coordination. In E. Ochs Keenan & T. Bennett (Eds.), *Discourse across time and space* (pp. 69-108). CA: University of Southern California.
- Leeper, C., Anderson, K. J., & Sanders, P. (1998). Moderators of gender effects on parents talk to their children: A meta-analysis. *Developmental Psychology*, 34(1), 3- 27.
- Murase, T., Dale, P. S., Ogura, T., Yamashita, Y., & Mahieu, A. (2005). Mother- child conversation during joint picture book reading in Japan and the USA. *First Language*, 25(2), 197- 218.
- Teale, W. H. (1986). Home background and young children's literacy development. In W.H. Teale & E. Sulzby (Eds.), *Emergent literacy: Writing and reading* (pp. 173- 206). NJ: Ablex Publishing.